

「 “痛苦” と “醜” 」

佐藤民人

「神が笑うとわかっているのに、どうして考えようとするのか」（注1）これは『存在の耐えられない軽さ』の作者、ミラン・クンデラの「人が考えると神はそれをを笑う」をもじったものである。この問いに莫言はこう答える。「それは人間が徹底した生き物ではないからである。……例え相当道徳的に見える人でも、実際にはわりに不道徳である。……」私はこれが莫言の基本的な創作態度であると思う。相反する二つの事物の同時存在——苦痛と歓楽、美と醜、善と悪——これらが、若しくはその入り混じった人物を作品中に見いだすのはたやすいことであるし、また一般的には否定的な要素（苦、醜、悪等）を肯定的に描く部分も数多くある。これを「文学中の優美崇高な審美要素を“醜”によって置き換えようとしている」（注2）とする意見もある。はたしてそうなのか。中国において、莫言がどのように評価されているのか、それを見ながら考えてみたい。

（1）中国の評論に見る莫言像。

まず、莫言個人若しくはその作品についてではなく、当代文学に関する文章で部分的に取り上げているものについて見てみる。特に86年はその前年に劉索拉「你別無選択」、韓少功「爸爸爸爸」、徐星「無主題変奏」等、いわゆる現代派の作品が発表されたこともあり、莫言、そして「透明的紅羅卜」もその一つとしてしているものが殆どである。そのうち代表的な例を幾つか挙げてみると、

（「透明的紅羅卜」は、“文革”中の話だが）ここではそのぼかげた、悲しむべき、時代背景は薄められ、……（登場人物の）時代的な色合いも同様である。……この作品は象徴的手法を用いて、この“黒孩”を通じて中国農民の屈強な生命力とある特定の歴史環境における生存形態を明らかにした。（注3）

莫言の作品は感覚と潜在意識の階層にそって展開される。（注4）

簡単なプロットは密集する意象と感覚、“官覚”の集合場所である。（注5）

彼（莫言）は書いた言葉が、円熟を感じさせるとか、整っているかなどは気にかけない。ただ、自分の感覚を表現することに心をくだいており、その他は一切かまわないのだ。（注6）

（莫言と張賢亮を比較して）莫言は人間の原始的な起動力をより重くみている。……彼は伝統的な小説中の集団意識を徹底的に個体意識に還元した。…非理性的伝達を一種の小説技巧となすのも彼の大きな特色であり、その小説中特に光るのは理性的分析ではなく、生命の躍動に対する非理性的感覚の部分である。（注7）

莫言の小説を読むならば、思考は捨てて、すべての感覚器官を解放して、連想、体験するのがよい。彼の小説にはヴァン・ゴッホの趣がある。（注8）

以上が主なところであり、これらは、

- （a）中国民族の持つ忍耐力と誠実さ、苦難中の理想と美の追求（特に「透
明的紅羅卜」と「紅高粱」に関して）
- （b）幻想的な雰囲気とリアリズムの交錯
- （c）感覚——主観の飛翔の重視とそれを伝える特異かつ自由な言語感覚
- （d）絵画的要素

の四点に要約できる。次に、莫言個人若しくはその作品を主題としたもの（注9）に目を移すと

- （e）幼少時の記憶と視点
- （f）映画的手法（スローモーション、アップ、フラッシュ・バック等）の多用
- （g）フォークナー、マルケスの影響——高密東北郷の創出

を加えることができる。これらの特徴は小説以外の創作談にもあらわれている。

「創作者は天馬が空を駆けめぐるような狂気と雄壮さをより多く、思慮や猜疑は少なくすべきだと主張する」「童年時代の印象は特別に深いもので、一生忘れ難い」「苦難に満ちた童年時代は作家にとって最上の学校である。下層の人びとと広く、深い関係を保ち、その苦痛を理解してこそ、作品に力量が生まれる」（注10）

「海に行ったことのない人が描く海は、現実のそれよりも美しいだろう。それ

は彼が海に関する知識を想像によって高度に理想化したからであり、その海は必然的に神秘的雰囲気と童話的な色彩を帯びてくる」(注11)

「今すぐにフォークナー、マルケスの二人から逃げ出したいくてたまらない」(注12)

以上、中国における莫言の評価について見てきた。(a)～(g)の見かたについてはおのおのまた検討する必要があるが、ここではそれをせず、私個人の考えとして(h)を、以下(2)で付け加えてみたい。

(2)

彼が何故“痛苦”や“醜”を書くのか。それは勿論、単なる技巧上の問題ではない。「彼(黒孩)は苦痛と歓楽、友情と愛情、善悪と美醜に対して彼なりの評価基準を持っているはずである」(注13)というだけでもない。私はそこに彼の問題意識の強さを見る。“痛苦”を生み出す、若しくはそこから、“歓楽”を見出さざるを得ない状況に対する痛烈な批判とともれよう。この社会状況に対する敏感な問題意識を「『金髮嬰兒』を軍婚問題の反映、『球状閃電』を改革中の農村の現実に対する考えとすることは徒勞である……」(注14)として片付けるわけにはいきまい。彼の友人が彼の作品を冷たいと評したというが、私はそうは思わない。確かに“痛苦”を徹底的に暴き出す冷徹な目は持っているが、それは強者に対する憎悪と弱者に対する愛情に支えられている。それが強く表れているのが「天堂蒜苔之歌」である。この作品には強い批判もあり(注15)、彼の作品の中でも優れたものとは言えないが、その問題意識が、特にラストの部分に最も強く表れており、その衝動ゆえに一ヶ月ほどの短時間で書き上げることが可能であったと思われる。その他の作品、例えば「爆炸」「歓楽」にも問題意識と“痛苦”の結合は色濃く出ている。ただ、「歓楽」や「紅蝗」になると、感覚化は著しく、特に“醜”に対する描写には「まるで節制がない」「意識のたれ流し」等の批判があるのも無理からぬことである。“痛苦”が全肉体、全精神の解放によって表現される過程において、従来“美”と同時に存在しながらも理性・道徳・文化の名の下に否定されてきた“醜”をも「批判的な賛美と賛美的な批判」によって表現しようという試みはわかるが、今のところ、成功しているとは言えないだろう。

最後に、彼の二作目の長篇「十三歩」(『文学四季』88)について少し述べてみようと思う。ごく簡単に言うと

ある都市の中学校、物理教師の方富貴が授業中に倒れ、死亡するところか

ら始まる。（「歡樂」の後半に同じような場面が出てくる）だが、彼の意識は死んでおらず、いわば“生ける屍”の状態です。遺体整形師の李玉蟬の手もとに送られる（李は方の同僚であり隣人でもある張紅球の妻である）。彼女は方がまだ生きており、彼に整形手術を施し、夫の身代わりにする。そして本当の張紅球は行商に出かけ、方は代わりに学校へ行く。ここからこの三人および方の妻、屠小英の四人のを軸に過去、現在、未来が交錯しながら破局を迎える。

この作品もまた根底には問題意識と“痛苦”の結合があるが、他の作品とは比較にならないほど強く突き放すような調子と絶望感がある。それは、(1)で触れた (e)の要素がないからである。彼の作品に暖かみと希望をもたらす幼少時の記憶と視覚、それを具体化する子供の存在が「十三歩」にはない。逆に方富貴や張紅球の息子、娘は大人のカリカチュアとして描かれている。この「十三歩」はある意味で莫言の頂点とも思える。それは「歡樂」あたりから彼の手を離れひとり歩きを始めていた“醜”がここでは他の全てを圧倒し覆いつくしているからである。ここで都市の“醜”と“痛苦”を徹底的に意識、暴露した彼がそれと“高密東北郷”を対比させようと試みたのが“你的行為使我们感到恐懼”（『人民文学』89年第6期）である、というのはいささか単純すぎるかもしれないが、どうも私には童年——高密東北郷——美と歡樂、成年——都市——醜と痛苦、という図式がちらつくように思えてしょうがない。

莫言の創出した——高密東北郷——は混乱と朦朧に覆われた世界である。そこにおいて、痛苦は即ち生活の力量となり、美と醜は目まぐるしく反転する。以前は点在のみであったが、「紅高粱」シリーズにより具体的にその一端を表し始めた。そして「紅蝗」や「玫瑰玫瑰香氣撲鼻」に登場する“食草家族”がまたその世界を広げようとしている（注16）。今後どのように展開していくのか、非常に楽しみである。

【注】——とくに断りのないものは、すべて莫言のことば。

- 1 《上海文学》88-4期
- 2 《读书》88-10期 王干〈反文化的失敗〉
- 3 《学习与探索》86-2期 廖俊杰〈文学新潮的特征和创作道路的选择〉
- 4 《文艺评论》86-3期 张志忠〈领导标新二月花〉
- 5 《文艺理论研究》86-3期 南帆〈小说技巧十年〉

- 6 《当代作家评论》86-5起 王晓明〈在语言的挑战面前〉
- 7 《文学评论》87-2期 罗强烈〈小说叙述观念与艺术形象构成的实证分析〉
- 8 《当代文艺思潮》86-3期 李洁非、张陵〈一九八五年中国小说思潮〉
- 9 《上海文学》86-4期 程德培〈莫言创作中的童年视觉〉／《读书》86-6期 张陵、李洁非〈莫言的意义〉／《艺术研究》86-4期 张志忠〈论莫言的艺术感觉〉／《当代作家评论》86-4期 朱向前〈莫言小说“写意”散论〉等，有关论文较多。
- 10 《文学评论》86-2期 〈我的文学观〉
- 11 《解放军文艺》85-2期 〈天马行空〉
- 12 《青年文学》85-2期 〈黔驴之鸣〉
- 13 《文艺报》85-7-6 〈桥洞里长出红萝卜〉
- 14 《读书》86-6期 张陵、李洁非〈莫言的意义〉
- 15 《读书》88-10期 王干〈反文化的失败〉
- 16 《当代作家评论》88-5期 李洁非〈莫言小说里的“恶心”〉／《钟山》88-1期 陈思和〈历史与现实的二元对话〉

文学报 1989.11.2

丁玲塑像在临澧落成

本报临澧讯 无产阶级文艺战士、著名女作家丁玲同志塑像在她的故乡——湖南省临澧县城“早春园”落成。10月12日上午举行了揭幕仪式。文化部部长助理高运甲、常德市委书记陈彰嘉为塑像揭幕。丁玲同志的丈夫陈明、子女和著名作家、学者巍巍、康濯等以及各级党政军领导100多人参加了揭幕仪式。

丁玲1904年10月出生于湖南省临澧县余市镇高丰村（原名湖南省安福县黑胡子冲），1986年3月在北京逝世。1987年中共中央宣传部批准同意在丁玲故乡临澧县塑像。共青团临澧县委开展了为丁玲塑像募捐的活动，得到了社会各界及丁玲同志生前友好的大力支持。这座花岗岩全身塑像高2.4米，由著名雕塑大师刘开渠任艺术指导，中央美院著名雕塑家张德蒂教授创作。塑像呈随和的坐姿，波浪式披发任风轻拂，饱经风霜的脸上浮现着微笑，洞悉社会、人生的明眸望着远方。（周 向）